

研修名 支援を必要とする子どもの保育

令和元年8月22日(木) 10:00~12:30

講演 「障がいのある子どもの発達と援助」

講師 京都文教短期大学 張 貞京 氏

1 講演要旨

1) 保育上で大切にしたいこと

・安心できる大人との関係が基本となり、他児と関わる楽しさ、嬉しさ、分かり合えた経験をたくさんすることで、集団で力が発揮される。

・課題を遊びの中で取り組む→全身で実感することが発達につながる。

○障がいの種類や程度に関わらず、安心できる居場所、わかる表現で伝えてくれる、気持ちや思いをわかってくれる保育士であること。

*生涯発達の視点：まずは就学後の姿を見据えて準備したい。

2) 知的な遅れがある子ども

・全般的な遅れがある。・境界線級や軽度の子は発達障害と似ている（見落とされることがある）。・ゆっくりだが、成長していく。

3) 知的な遅れがある子の理解

・抽象的な事柄の理解・判断が苦手→必要な情報に注意を向けることが難しい。

・ワーキングメモリの容量が小さく、意味理解が難しい→刺激に注意を向ける持続時間が短く、溜めておける情報量が少なく、情報処理の速度が遅いため、意味理解が進まない。

4) 援助のポイント

①情報に注意を向けやすくする。②意味をわかりやすく伝える。

③集団全体の目標を明確にし、知的な遅れがある子どものその取り組みにおける課題を設定する。

5) 肢体不自由の子ども

・運動、姿勢の障害 ・様々な感覚の問題 ・視知覚の問題

6) 援助のポイント

①活動（特に運動活動）を豊かにする。②能動性を引き出す。

③集団的な支え合いが育つように特別扱いはしない。

7) 発達障がいの理解

・先天的に持っている要素+環境からの不快な経験が繰り返され適応できなくな

る＝発達障害と理解する。

☆適応障害を引き起こさないことが教育の場、特に子どもたちにとって最初に経験する保育所の主たる課題となる。

8) 集団生活のポイント

- ・経験不足の子どもが多い（保護者も経験不足）
- ・もの事について考える力→大人は理由や見えない事項について、一緒に考え、問いかける姿勢であるか。
- ・選び取る力（自我の育ち）

○発達障がいのある子どもの得意なこと、知っていることで他児とつなぐ。

9) 心配な姿から考える。

- ①動きが止まる、待てない→スタート時に意識が目覚める動きを取り入れる。全身で感じる時間の保障。
- ②不器用な子ども、感覚過敏の子ども→遊びを通して全身のボディーイメージを高める。嫌なことはあるけれど、友だちと過ごしたい思いに気付かせる。
- ③場面切り替えができない→自分で切り替えられたことを認められる経験を。
- ④言動が暴力的→他児にもう一つの姿を知らせ、思いを適切に伝えられるよう援助する。遊びの見直しをする。
- ⑤遊びを通して、ボディーイメージを育てる→体に触れて、場所当てをする。砂遊びや水遊び、全身で受け止められている感覚を覚える遊びなどをする。

10) 就学に向けて

- ・どの集団、クラスのみでなく連携を試みる。小学校との連携→要録、支援シートなど。

☆就学までに育てたい事

- ・自己肯定感
- ・得意じゃないけれど、やってみたら少しできたという経験
- ・相手に思いを伝えられるようになる（拒否の表示・助けを求める）。

2 感想

障がいのあるなしに関わらず、子どもが発達していくためには安心できる居場所と、受け止めてくれる大人の存在が大切で、初めての集団生活となる私たち保育園の保育士たちが大切にしなければいけないことを、再度考えさせられる研修となりました。支援のいる子どもと他児をつなぐ場所でありたいと思いました。ありがとうございました。

（記録 認定こども園 中筋幼児園 谷内鮎子）